

神西式土器文化の再検討

岡本健児

Renewed Study of the Kounosai Type Pottery Culture

Kenji OKAMOTO

(昭和46年12月1日受理)

I 序

南四国における弥生式土器の1型式として、神西式土器を提唱したのは、昭和26年のことであった¹⁾。その後、神西式土器は広く南四国に分布する土器であることも判明し、さらに高知県中央部より東の地域においては、凹線文の発達した土器にも伴い、西四国においても、ある種の弥生式土器に神西式土器系統の土器が伴うことも判明しつつある²⁾。

この神西式土器については、従来から筆者は弥生後期前半の土器という时期的な考えを持っていたし、また畿内的な弥生式土器の様式論でいけば、第4様式の弥生式土器に該当することも論じたことがある³⁾。

本紀要18巻の“南四国における櫛目文土器の成立⁴⁾”，でもふれたように、南四国では前期後半の弥生式土器から以降、中期前半の土器にかけて瀬戸内的な影響下にある土器が卓越する。そして中期中葉以降から、南四国の地方色の強い土器が出現しだし、南四国独自の土器というよい神西式土器が成立する。

神西式土器とその文化についての論考・報告は、先述した昭和26年のものから数えて10編近くのものを書いている。ところが最近、県内の2～3の遺跡および出土の弥生式土器を調査する機会にめぐまれたが、それによって筆者が従来持っていた神西式土器とその文化に対する知見以上のことが明確になった。さらに従来住吉式土器として、畿内第5様式に該当する弥生式土器も、新しい知見からこれを前後の2型式に分類することも可能になった。

本考では神西式土器を主として、同期の土器を多量に出土している高知県吾川郡伊野町バーガ森北斜面遺跡を紹介し、その遺跡出土の神西式土器とそれに伴う凹線文土器を詳述する。そしてそれによって、神西式土器の編年的位置づけを再論し、進んで神西式土器のもつ文化まで論ずるつもりである。

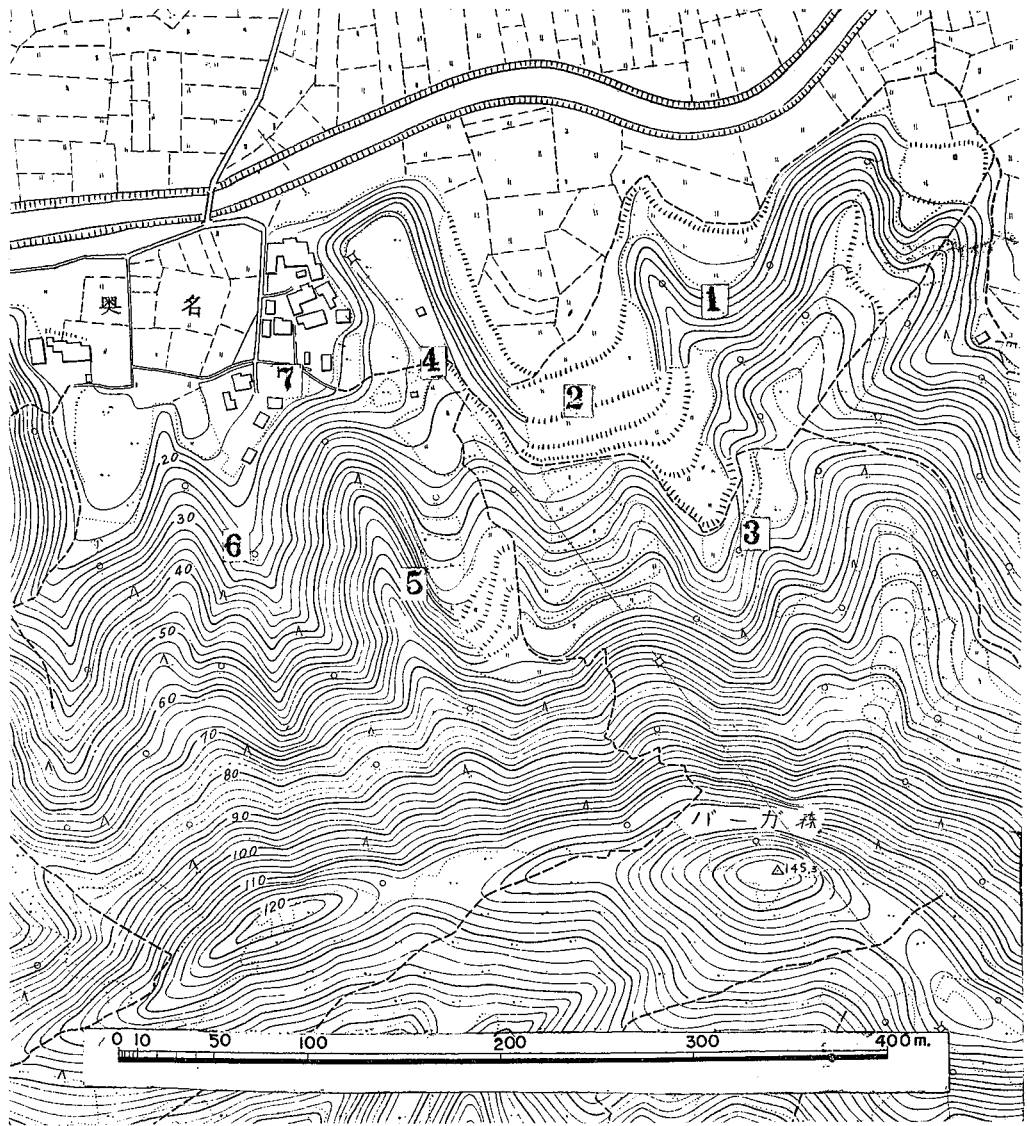
なお神西式土器が弥生中期の土器であるか、あるいは後期の土器であるかの時期論は、中央学界の弥生中期と後期の線をどこでひくかの論争につながる問題であるが、本考では神西式土器とその文化からも、この問題にもふれるつもりである。

注

- 1) 岡本健児：土佐神西遺跡調査概報 上代文化第20輯（昭和26）
- 2) 岡本健児：“高知県の考古学”，吉川弘文館（昭和41）
- 3) 岡本健児：南四国地方 弥生式土器集成本編I 東京堂（昭和39）
- 4) 岡本健児：南四国における櫛目文土器の成立 高知女子大学紀要人文・社会科学編第18巻（昭和45）

II 谷水田の土器文化

バーガ森北斜面遺跡はかつて筆者が奥名遺跡（伊野町奥名三世庵）とよび、鉄刀子と弥生式土器（神西式と龍河洞式）とが発見されている¹⁾。ところが最近になって、本遺跡は標高145.3mのバ



第1図 バーガ森北斜面遺跡地図

ーガ森の北斜面にかけて広く存在し、その面積も東西450m×南北300mにおよび、従来発見されていた奥名三世庵地点だけでないことが判明した。しかも後述するように、本遺跡出土の弥生式土器は、神西式土器とそれに伴う龍河洞式土器であって、時期的には1時期の土器のみが出土するのである。よって筆者は本遺跡を、今後奥名遺跡からバーガ森北斜面遺跡と改称したい。

バーガ森北斜面遺跡については、本格的な発掘調査をおこなっていないので、その遺構は明確でない。ただ本考では今までにあきらかになっている遺跡の様相をまず紹介し、神西式土器文化期に

おける生産面の1つの特色を把握しようとするにある。

バーガ森北斜面遺跡は先述したように、450×350mの広範囲にまたがる遺跡であるが、実はその範囲内すべてが遺物包含層ではないのである。この広範囲のなかで、遺物を出土する地点がいくつか存在するのである。現在までに判明している地点 および出土遺物を列挙すると、次のようになる。(第1図)

- 1 三世庵地点 土器・磨製石斧・石庖丁・敲石・凹石・砥石・鉄製刀子・鉄製鉋
- 2 菖蒲谷地点 土器
- 3 新崎地点 土器・石庖丁
- 4 岩神地点 土器・石庖丁・磨製石斧
- 5 岩神ノ上地点 土器
- 6 岩神洞穴 土器
- 7 奥名地点 石庖丁

以上のほかに戦前に寺石正路翁が岩神洞の北西部斜面から弥生式土器片が出土し、調査に来られたことがあるという。そして当時は、いま述べた1～7までの遺跡地点はまったく関知されなかったという。また先述した7の奥名地点は石庖丁のみの単独出土地点であって、土器の出土はまったくないので、1～6の遺跡地点とは性格が異なり、すくなくとも集落関係のものでないことは確実である。それに対して、他の6地点は土器片が多く出土し、それも大体3～5mぐらいの広さの範囲から発見されるので、集落関係のものであろう。ただ岩神洞については、洞穴内での大きな土器片の発見であるので、これは集落関係のものか、墳墓関係のものか定かでない。

いずれにしても、6地点のうち岩神洞穴を除いて、5つの地点からは多くの土器片と石器などが発見されているので、これは集落関係のものともみてよかろう。そうするとこの5つの集落地点は、その距離間隔などからしてそれぞれが住居関係のものとも推測して誤りない。岩神洞を除くこの5つの住居関係とみられるこれら遺物包含層の地点は、すべて菖蒲谷にのぞむ場所に存在する。三世庵・菖蒲谷・新崎の3地点は、菖蒲谷の東側の傾斜面に、谷に平行に列んだように存在する。それに対し菖蒲谷の西側に列んで、岩神・岩神ノ上両地点がある。5つの地点の標高は、三世庵地点—20m、岩神地点—25m、菖蒲谷地点—35m、新崎地点—45m、岩神ノ上地点—45mである。

さてこのような菖蒲谷(谷の入口から谷の奥まで約170m)にのぞんで、このような傾斜地に集落を営む遺跡は、南四国を含めて西日本に弥生中期以降に多くみられる。このような谷にのぞむ西日本の代表的な集落遺跡として、岡山県津山市沼遺跡を挙げることができる。この沼遺跡については、次のように述べられている。

“岡山県津山市の西北にある沼遺跡は、まわりに谷水田をもつ突出丘陵を占居した弥生時代中期の集落であるが、丘陵突出部の基部の周濠をほりめぐらして他と区画した内部に、大小五つの堅穴住居がほぼ半円状に配列され、中央に作業場か物置きか不明な長方形の遺構がみとめられる。周濠外方には、ややはなれて倉庫と推定される高床建築物の構築がみられる……”²⁾

この沼遺跡の状況から、バーガ森北斜面遺跡をみても、5個所の遺物出土地点はあきらかに住居址関係とみてよいであろう。そして菖蒲谷とよばれる谷は、これらの各住居址群からは一望の下にあり、さらに地形からみて当時の谷水田であったのでなからうか。谷水田をはさむ形で、両側の傾斜地に住居が当時形成されたのであろう。

このような谷水田の存在を推定させる遺跡は、南四国の場合、神西式土器を多く出土するのである。神西式土器が発見された場合、現地にいってみると、その90%までが、谷水田を持つと推定される集落遺跡である。もちろんバーガ森北斜面遺跡から発見される土器群は、神西式土器を主体としている。

かかる点で神西式土器文化は、南四国における谷水田の経営を基盤とした文化といっても言いすぎではなからう。このバーガ森北斜面遺跡からは、まだ1個の石鏝も発見されていないが、石庖丁は打製石庖丁も含めて10個近く発見されている。これは谷水田の経営に、生業の主体をおいていたことを物語るものである。

さらに注意すべきことは、神西式土器につぐ次の土器型式の時期には、バーガ森北斜面遺跡にみられるような谷水田をかこんでの小高い丘陵上の住居群はまったくみられなくなる。そして低湿な沖積地を立地とする集落がみられるようになる。

このように神西式土器文化の時期は、谷水田の盛行する時期であるが、この神西式土器に先行する土器型式について、筆者はかつて朝倉式土器の名称でこれと呼んだ³⁾。この朝倉式土器を出土する高知市朝倉城山遺跡は、土器型式からみると、神西式土器とそれに先行する朝倉式土器とが発見されている。神西式土器に先行する朝倉式土器は、朝倉城山遺跡では数すくないが、神西式土器に先行する弥生式土器型式では、もっとも南四国では最初に発見されているので、この名称はなお引きつづいて呼称することにした。

さてこの朝倉城山遺跡も谷水田を一望にのぞむことのできる遺跡であり、バーガ森北斜面遺跡とは尾根伝いに簡単に行ける遺跡である。この両遺跡間の距離は尾根伝いに歩いて、約3kmである。この朝倉城山遺跡について特記すべきことは、先述したように神西式土器に先行する朝倉式土器が出土していること、そしてそのことより南四国における谷水田の経営が神西式土器より1型式古い朝倉式土器の時期にはじまっていることを物語ることである。

南四国での現在までの朝倉式土器の発見地は、7個所にすぎない。7個所しか朝倉式土器が発見されないのは、この期の遺跡が低湿な現在の水田下に多く埋蔵されているからである。さらに現在まで発見されている7遺跡のうち、谷水田を持っていたと考えられる遺跡は4遺跡である。残りの3遺跡は中村市入田遺跡や南国市田村遺跡のように弥生前期前半ないし中葉から、ずっと引きつづいた自然堤防上の遺跡や低湿な沖積平野のなかにある吾川郡伊野町大デキ遺跡である。こういう点で朝倉式土器の時期は、南四国で谷水田の経営がはじまり、谷水田をのぞむ丘陵地に集落が形成されたのであろうと考えてもよいであろう。そして朝倉式土器につぐ神西式土器の時期は、谷水田にのぞむ丘陵地に集落の形成されるのが卓越化してしまったのである。

南四国の弥生時代のなかで、神西式土器の出土する遺跡が他のどの時期のものよりも、圧倒的に多い。遺跡の数量が圧倒的に多いということは、当時の人口の増加を示すことであろう。神西式土器を使用する段階になって、南四国では急激にその人口の増加をきたしたのであろう。この神西式土器文化期の人口の増加を、経済的にささえたものは谷水田の経営であつたらう。

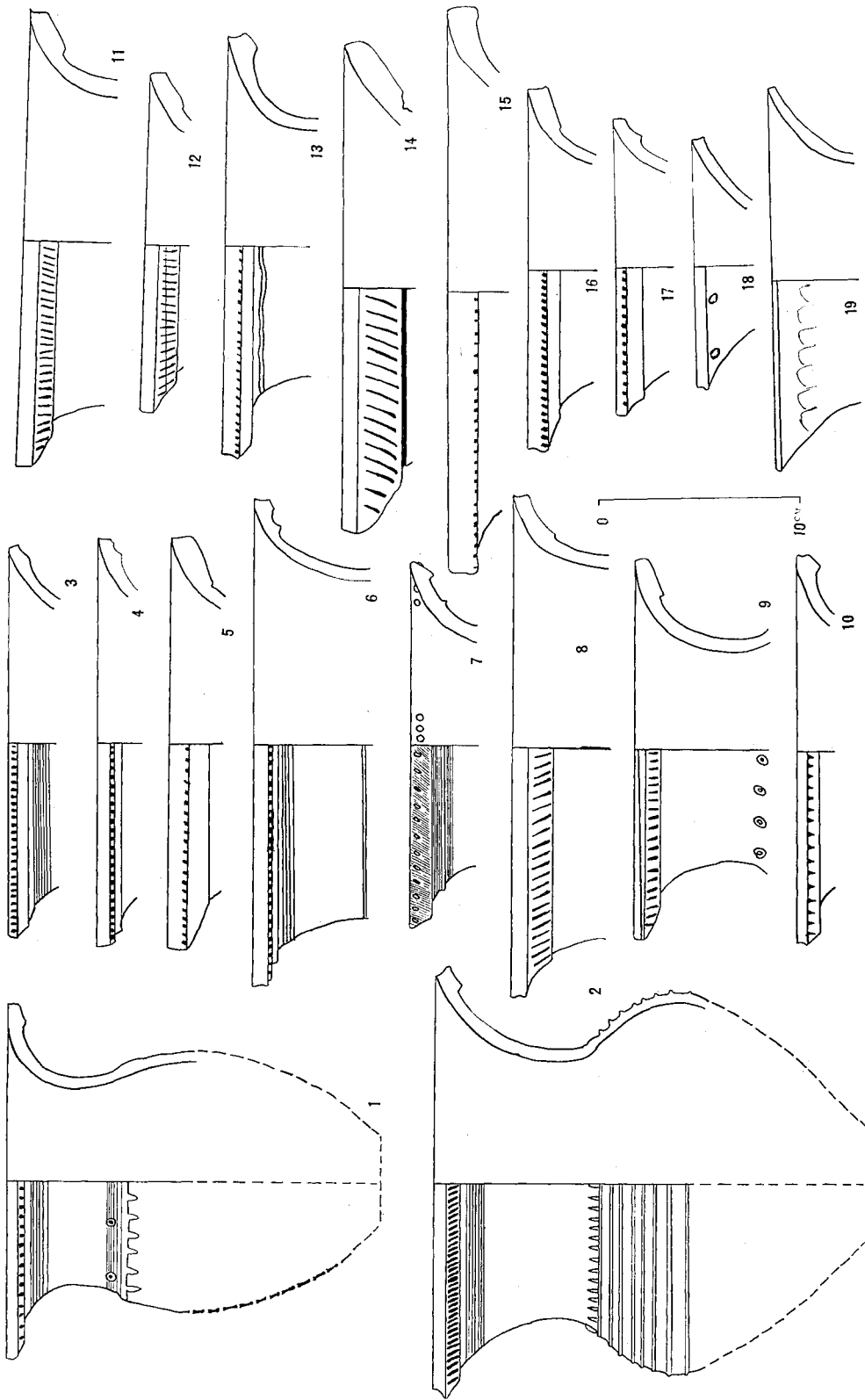
ではここで谷水田の文化ともいえる神西式土器文化における神西式土器そのものを、ここで検討してみよう。

注

- 1) 岡本健児：“高知県の考古学”，吉川弘文館（昭和41）
- 2) 近藤義郎：弥生文化論 日本歴史I 岩波書店（昭37）
- 3) 岡本健児：“高知県史考古編”，高知県（昭和43）

III 神西式土器について

神西式土器の名称は、高知県高岡郡窪川町神西遺跡において筆者が昭和25年に発掘調査をおこなったので、その結果南四国にて未検出の弥生式土器であったので、発見した地名をとり以後神西式土器と呼んでいる。その後この神西式土器が、南四国を中心に分布し、それも南四国の西部においては他型式の土器を混入しない状態で発見されることが判明した。そしてさらに南四国の東部、西四国の



第2図 壺形土器A類およびB類 (バーガ森北斜面出土)

北部においては、他型式の土器と混在する。これらの混在については後述するつもりである。

さてここで神西式土器を論ずる資料として、バーガ森北斜面遺跡発見の土器を詳述しよう。バーガ森北斜面遺跡発見の土器で、伊野町奥名三世庵遺跡出土のものとして、従来すでに発表したものは¹⁾、図示せず、新たに発見された新資料でこれを紹介したい。

バーガ森北斜面遺跡出土の神西式土器は、形式として壺形、甕形、高杯形が存在する。

壺形土器

壺形土器はその口縁部の作りからこれを3類に分ける。

A類(第2図1~17, 第3図1~2, 4~16)

口縁部が複合口縁になっていて、その複合部の1部に篋による列点文・圧痕文がつけられている。1例であるが、列点文・圧痕文のかわりに櫛描文(第2図の7)の場合もある。この場合は櫛描文の上に、小形橢円浮文がある。

また複合部から頸部に移る部分で、1本の沈線文、2~9本の櫛描直線文がある。さらに上胴部には、櫛描平行直線文・断面三角形凸帯・円形浮文・棒状浮文・円形刺突文などの文様を組み合わせ、いろいろな文様帯を作っているものもある。

口縁部の外反のわりに、胴部の張らないものが多いようである。数多くのA類のなかで、口縁面に文様を持ったものは1例だけである。それは円形浮文で3個を横においたものを1単位として、これを間隔をおいて繰り返し配置している。底部は器体の大きさの割に小さく、平底である。

B類(第2図18~19)

複合口縁を持たない、しかも文様のすくない壺形土器である。1例は口縁下の頸部に移る部分に円形浮文を持ち、1例は同じ個所に調整時の指頭圧痕文が残っているものである。

C類(第3図の3, 第4図1~2)

筒状の口頸部を持ち、やや口縁が外反した壺形土器である。口縁部を複合口縁状にしたものもあるが、そうでないものもある。しかし口縁下には篋による圧痕文は、かならずつけている。頸部には小形円形浮文・断面三角形凸帯を持つ。第3図の3の把手は、このC類に属するものとみてよからう。

甕形土器(第4図の3)

神西式土器の甕形土器は、口縁部が外反し、口縁端がわずかに跳上り状を呈する。頸部はくの字状をなし腹部が張っている。内外面は刷毛目で調整している。底部は平底と考えられる。口径の大きい割には、甕の高さが余り高くなくとも神西式土器の甕形の特徴である。

高杯形土器(第4図の6)

神西式土器の高杯は、窪川町神西遺跡で発見されている。杯部は広く外方に広がり皿状をなしている。稜を持たない。脚台部はなかが中空でなく、裾部になって中空になるのも、この式の脚台の特徴である。バーガ森北斜面遺跡から、この式の高杯は脚台だけが発見されている。

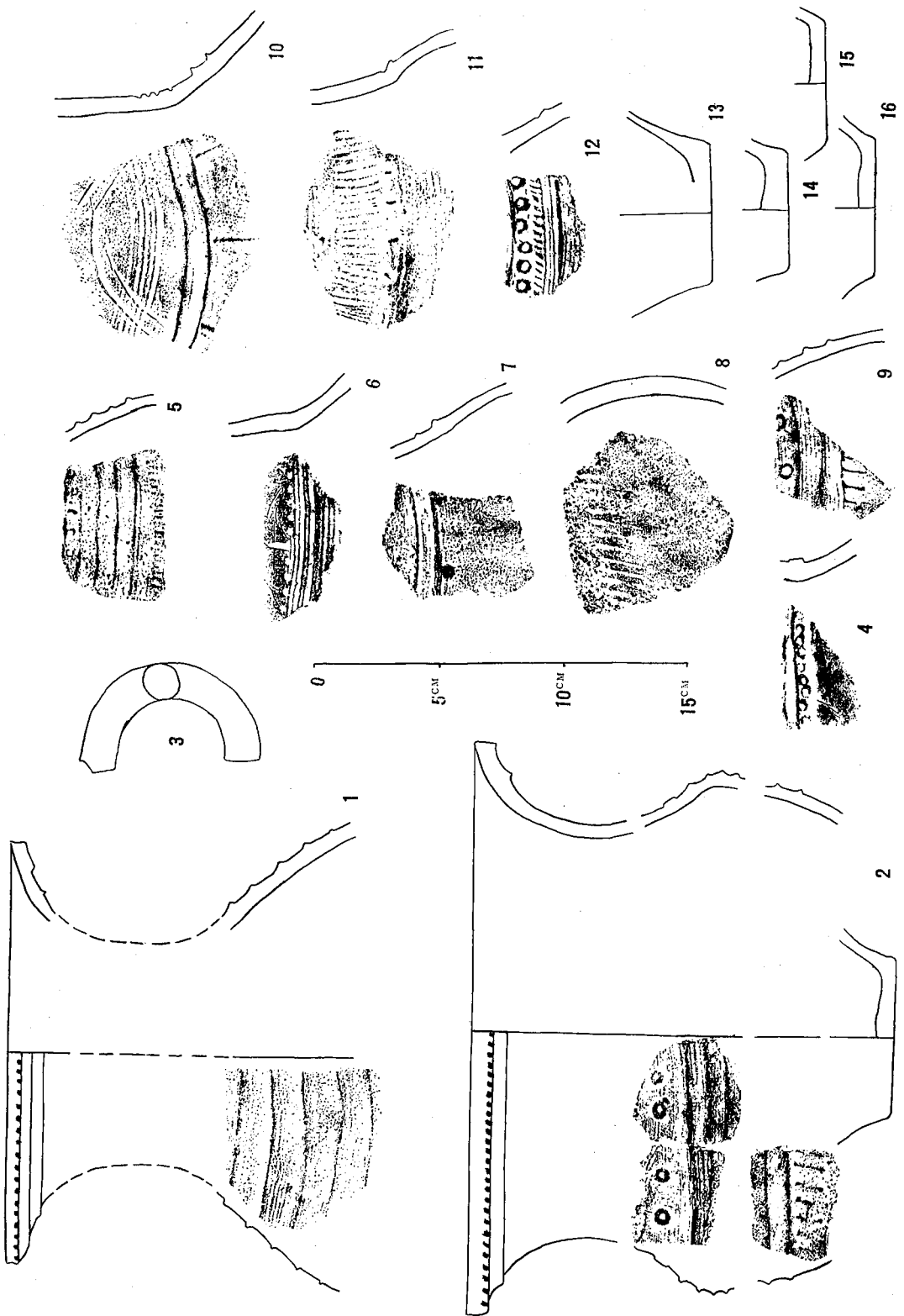
以上バーガ森北斜面遺跡より出土した神西式土器について概述したが、同遺跡出土の弥生式土器は以上述べた神西式土器だけでなく、以下述べるような凹線文の発達した土器が伴出する。これら凹線文の発達した土器も、壺形、甕形、高杯形の三形式がある。

壺形土器

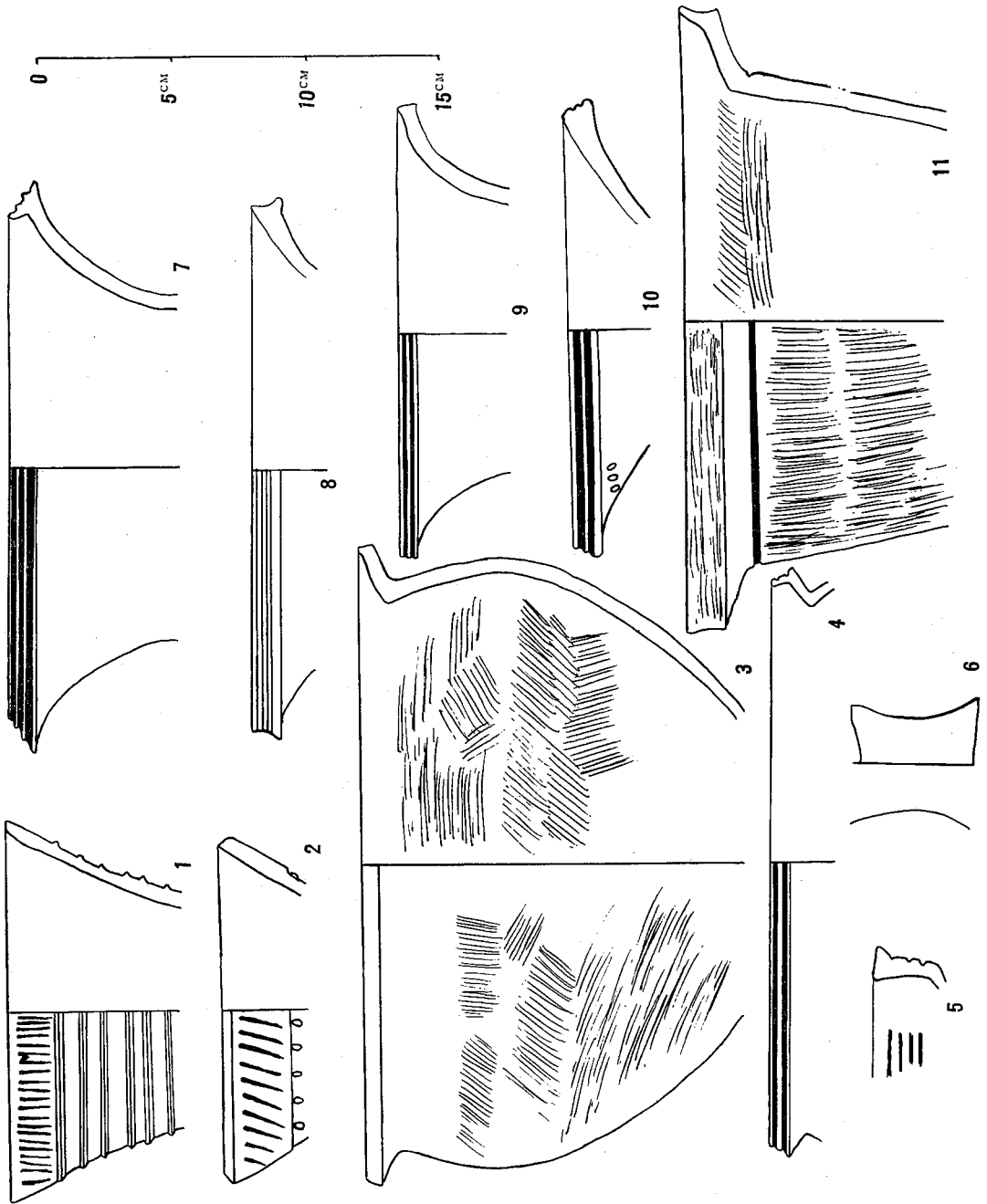
これも口縁部の作りから4類に分類したい。

A類(第4図の7)

口縁端が上下に拡張され、その下端が外にはり出して斜面をなしている。口径20cmに近い大形の壺形土器である。口縁端につけられた凹線文は3本である。この類の土器例は南四国ではすくない。



第3図 壺形土器A類と把手 (バーガ森北斜面出土)



第4図 神西式土器と凹線文土器 (バーカ森北斜面出土)

B類 (第4図の9・10)

外反した口縁端が下部にわずかに拡張され、口縁部に2本の凹線文を持った壺形土器である。このようなB類の壺形土器は、香美郡土佐山田町龍河洞²⁾、土佐郡土佐山村菖蒲初平カ岩屋³⁾、南国市田村見当⁴⁾などの諸遺跡より発見されている。なお10の土器には頸部の上部に円形浮文がつけられている。

C類(第4図の8)

口縁部の作りはB類に近いが、凹線文がなく、そのかわりに4本の櫛描文が口縁端に存在するものである。

D類(第4図の11)

口径が20cm以上の大きい壺形で、屈曲して直立する口縁部には当然凹線文が入られるべきものであるが、それがなく、頸部の上部には1本の凹線状の沈線が入られている。ただ直立の口縁部の幅は狭い。甕形ではあるが、この壺形の口縁と手法の同じくするものが龍河洞より発見されている。

甕形土器(第4図の4)

口縁端面を上方に拡張し、ここに凹線文を2本めぐらした甕である。肩の張りは強い。この種の甕形土器は、南国市田村見当から発見されている。

高杯形土器(第4図の5)

口縁上端面はほぼ水平面をなし、内方にやや拡張されている。また口縁部は肩の部分から曲折して直立し、口縁下に4本の凹線文を持っている。この遺跡のものは不思議と4本の凹線文のものだけが、3個体出土しているが、龍河洞出土の高杯は3本、南国市田村見当土のものは2~3本である。

以上バーガ森北斜面遺跡出土の弥生式土器を概述したのであるが、図示した資料の大半は三世庵地区出土のものである。ただ第2図16~18, 第3図12, 第4図10は岩神ノ上地点出土である。また第3図の11, 12, 15と第4図9, 11は岩神地点出土, 第4図の3は岩神洞穴出土のものである。

さてバーガ森北斜面遺跡からは、先述したように神西式土器が各地点より発見される。そして先述した凹線文の発達した土器も、各地点より神西式土器に伴って出土するものである。この凹線文の発達した弥生式土器は、バーガ森北斜面遺跡において神西式土器に伴出するだけでなく、南四国西部を除く各遺跡でその伴出がみられるのである。バーガ森北斜面遺跡では、その伴出の割合が神西式土器70%に対し、凹線文の発達した土器が30%である。

南四国の西部にある中村市石丸遺跡、高岡郡窪川町神西遺跡では多くの神西式土器が出土しているが、凹線文の発達した土器は今のところ1片も伴出していない。神西遺跡より7km北にある窪川町上作屋松葉川中学校校庭遺跡からは、神西式土器が多く出土しているが、高杯形土器に凹線文のあるものが、わずか1個出土しているにすぎない。伊野町バーガ森北斜面遺跡よりも、東部にある遺跡では凹線文土器の伴出量が多くなっていく。南国市田村見当遺跡では神西式土器が40%、それに伴う凹線文土器が60%で凹線文土器の占める率が大である。龍河洞遺跡では凹線文土器が80%で、神西式土器は20%という割合である。

このような状況からして、神西式土器が純粋な形で分布する地域は、南四国でも西部地方であるといつてよからう。

さて神西式土器に伴う凹線文の発達した土器は、南四国では研究史的にみると、龍河洞遺跡がもっともその発見が古いようである。その点から神西式土器に伴う凹線文の発達した土器を、筆者は龍河洞式土器と呼んでいるが、これに対しても現在同じ考えである。

この龍河洞式土器よりも1型式古いもので、凹線文の発達した土器が南四国に分布しているが、これはおのずからその土器の作り、櫛目文の発達それに分布においても異ったものを持っている。いわばその土器は龍河洞式土器の母胎であり、その移行型式の土器が龍河洞式土器なのである。

この龍河洞出土の弥生式土器に対して、小林行雄・佐原真氏は次のように述べられている。

“龍河洞遺跡では、頸部に凹線文をめぐらした壺、口線下と脚端とに凹線文をもつ高杯形土器など、中期IVの土器とともに壺A₂が出土している。”⁵⁾

これは両氏の序述の一端であるが、これからして両氏は龍河洞出土の土器を弥生中期の第4様式の土器にされていることがわかる。

弥生式土器の第4様式までを弥生中期とされるのは、小林・佐原両氏の持論であるが、杉原荘介氏は第4様式から弥生後期にされている。これについての私論も後述したい。

ここでは第4様式が中期、後期いずれに属するかという問題でなくて、龍河洞の弥生式土器が第4様式であることである。筆者も龍河洞出土の弥生式土器を、第4様式にすることに賛意を表すし、またそのように考えたことがある⁶⁾。とくに南国市田村見当遺跡の多くの凹線文の発達した龍河洞式土器が出土してから、その考えは強くなった。

結局上記のことから、神西式土器は第4様式とみられる龍河洞式土器と主として南四国中央部以東で伴出することから、神西式土器自体も第4様式土器であるという編年の位置づけができることになる。さてここで問題になるのは、西四国北部では神西式土器はどのような土器に伴出するのであろうかということである。

注

- 1) 岡本健児：“高知県の考古学”，吉川弘文館（昭和41）
岡本健児：“高知県史考古編”，高知県（昭和43）
- 2) 岡本健児：龍河洞の遺跡 高知県文化財調査報告書第10集（昭和34）
- 3) 注2に同じ
- 4) 岡本健児：高知県南国市田村見当遺跡調査概報 高知県文化財調査報告書第14集（昭和39）
- 5) 小林行雄・佐原真：“紫雲出”，託問町文化財保護委員会（昭和39）
- 6) 岡本健児：南四国地方 弥生式土器集成本編Ⅰ 東京堂（昭和39）

IV 西北四国の神西式土器

西北四国と筆者が呼ぶのは、現在の行政区画では愛媛県下の大洲盆地以南の地域をいう。愛媛県では現在この地域を南予と呼んでいる。とくにこの南予の地域は、考古学的にみて古い時期より南四国と密接な関係にある。神西式土器もこの南予に密接な関係を持つというより、南予にもこの神西式土器が分布しているといった方がよかろう。いまのところ筆者が実見した南予における神西式土器を出土する遺跡として、次の諸遺跡を挙げることができる。すべて愛媛県下である。

八幡浜市松柏覚王寺

東宇和郡宇和町岩木岩蔭

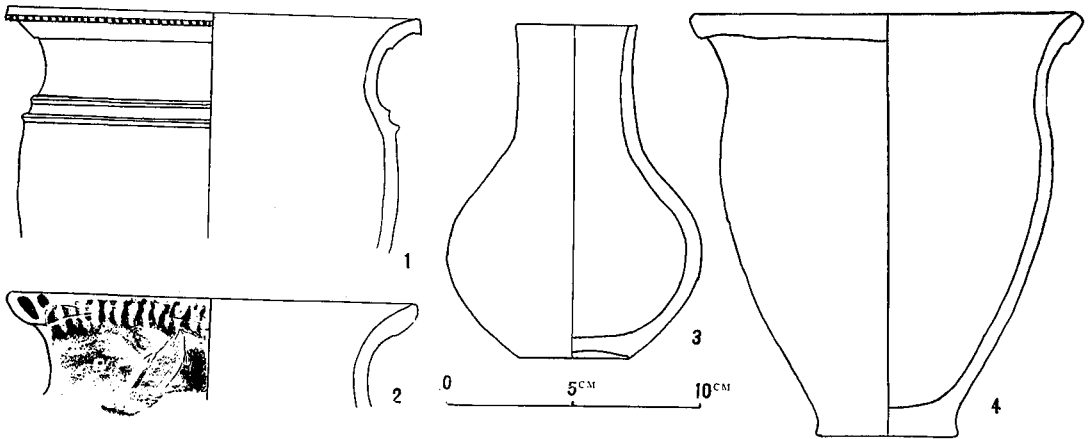
南宇和郡御荘町法華寺

注意すべきことは、以上3遺跡にみられる弥生式土器すべてが神西式土器というのではない。先述したバーガ森北斜面遺跡出土の神西式土器の如き複合口縁を持った土器群をさすのである。その点岩木岩蔭の土器は、神西式土器といってよかろう。（第5図）

長井数秋氏は南予における弥生式土器の編年をたてるについて、この神西式土器の存在で相当頭をなやまされたらしい。

“岩木Ⅰ式土器はかつて村島式土器の中に含ませていたが、ここでは細分化したい。それは甕形土器にもその差異が認められると共に、壺形土器にそれがより顕著に認められるからである。……”¹⁾

岩木Ⅰ式土器というのは、筆者のいう南予に分布する神西式土器のことである。村島式土器は大洲市菅田字宮ノ首村島出土の弥生式土器であって、これは神西式土器とは異なるものである。岩木Ⅰ式土器と村島式土器とを異った型式の土器とされたのは、確かに長井氏の卓見であるが、異った型式の土器が時間的な面だけでなく、地域を異にしてあらわれることの把握が充分でなかったように考えられる。特に南予の如きいくつかの文化圏にはさまれた地域はそうである。このことは長井氏自身気づかれていたのであるが、最終的には時間的差異にしてしまわれた。



第5図 愛媛県東宇和郡宇和町岩木岩蔭出土の弥生式土器

“村島式土器は村島を中心とする大洲盆地の周辺部の山麓に比較的多く分布している。……岩木Ⅰ式土器を出土する遺跡は岩木洞穴を除くと、八幡浜市入寺Ⅰ、Ⅱ遺跡や、徳雲坊Ⅲ、川舞、三本松、西宇和郡保内町の磯岡、宇和町の小原、更に南宇和郡の八幡神社、北宇和郡の興野々等と多い。……”²⁾

この長井氏の文からしても、村島式土器と岩木Ⅰ式土器とはその主とする分布範囲が異なるのである。ただ分布範囲が異なるといっても、その境界線は画然とせず、南四国における神西式土器と龍河洞式土器との関係の如くであろう。

結局筆者は村島式土器と岩木Ⅰ式土器とは同時期の土器であり、型的的にみると非常に密接な関係にある土器であると考えたいのである。村島式土器の甕形土器と、岩木Ⅰ式の甕形土器の類似点は、この考え方で解決すると思う。そして岩木Ⅰ式土器は南予に分布する神西式土器なのである。

さて村島式土器については、長井氏は次のように説かれる。

“村島式土器は、北四国の桧端式の手法を取り入れつつも、先行する都式の流れを汲んでいる。更に東九州を中心に発展していた大津式土器の施文手法の影響を受けている。”³⁾

この長井氏の意見には賛意を表するものである。ただここで重要なことは、村島式土器が北四国の桧端式の手法を持ち、都式土器に次ぐものである点である。筆者のみるところでは都式土器は、西北四国の第3様式の弥生式土器であり、桧端式は北四国の凹線文の発達した第4様式の弥生式土器である。ここでやっと結論に至ったのであるが、村島式土器と岩木Ⅰ式土器は神西式土器と同じく第4様式の弥生式土器ということになるのである。

注

- 1) 長井数秋：南伊予地方における弥生式土器 愛媛県立西条農業高等学校研究紀要創刊号（昭41）
- 2) 注1に同じ
- 3) 注1に同じ

V 結

以上神西式土器とその分布、さらに当時の主たる生産の在り方について述べてきたが、それらの諸説をまとめ、あわせてそれに関連する問題点をあげて結びとしよう。

1 神西式土器とよばれる弥生式土器は、西南四国において純なる型式として発見される。そしてそれは西北四国にも、南四国の東部にもみられる。前者では西北四国の村島式土器に伴うよう

あるし、後者では凹線文の発達した龍河洞式土器に伴出する。

さてこの龍河洞式土器は弥生式土器の型式編年からみて、第4様式に該当するものであり、また村島式土器も西四国北部の第4様式の土器である。このように神西式土器は、南四国東部と西四国北部で伴出する両土器が第4様式であることから、当然第4様式の弥生式土器ということになる。

2 従来筆者は神西式土器をもって弥生後期前半の土器としていた。しかし最近の南四国の後期弥生式土器（住吉式土器）の追加資料をもって考慮する時、第4様式である神西式土器までを弥生中期とした方が、合理的であるようである。

神西式土器文化期までは、バーガ森北斜面遺跡が示すように多くの石器類が出土している。それにくらべてこの神西式土器文化の次期からは、敲石・凹石・砥石の如き石器はあるものの、利器としての石器は存在しない。これはその期に鉄器が従来よりも普及したことによるだろう。偶然の発見であるが、南四国の弥生時代の鉄器資料4例は、すべてがこの神西式土器文化期のものである。このように神西式土器文化期の鉄器だけが発見されていることは、1面では次期の鉄器の普及を語るものであろう。このように神西式土器の時期までを、弥生中期にすると利器の面での後期との分離が明確になる。

3 神西式土器以降の後期弥生式土器は、神西式土器を除外して南四国では前後2つの型式に分類できるようになった。ともに中期的な櫛目文はみられない土器群である。しかし神西式土器には中期的な櫛目文が残っている。このような櫛目文の存続からしても、神西式土器までを中期とした方が、時期区分としては合理的である。

先述したように神西式土器文化の時期の農業は、南四国のみならず西四国においても、谷水田の経営に重点があったようである。この谷水田の経営は、当時としては多くの余剰生産を生んだのでなかろうか。この余剰生産が共同体における青銅器取得へかりたてたことになるのでなかろうか。なお神西式土器の時期には、広形銅鉾までの青銅器が出現していた確証がある。これについては他日論ずるつもりであるが、四国における広形銅鉾と神西式土器の分布は密接な関係にある。

またこの神西式土器の時期に、神西式土器分布圏内に岩蔭・洞穴関係の遺跡が相当数あることも注意すべきことである。これについても新資料の追加をまって論ずるつもりである。

(高知女子大学 歴史学研究室)